長谷寺かわら版
百日紅
94号
2016（平成28）年
1月1日

脚気地蔵の話

☆お地蔵さんの愛称

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

さて、世にあまたおわす仏さんたちの中でも、お地蔵さんは、とても身近な存在ですね。どの村にも街角にも、小さな地蔵堂があって、地元の信仰を集めています。通りすがりの人が、お堂に向かって手を合わせる姿は、日常的ですし、微笑ましいものです。

こちらが脚気地蔵尊におわします

そのお地蔵さんたちの中には、「延命地蔵」とか「とげ抜き地蔵」とか、ニックネームの付いたお地蔵さんたちも多くおわします。はじめからそういう名前が付けられていたわけでなく、熱心にお参りした人が、長生きができたとか、トゲが抜けた（病気が治った）などの功験（こうけん）があり、いつしかそう呼ばれ、親しまれるようになったのでしょう。

中には、水子地蔵という、はじめから水子たちの供養に特化したお地蔵さんもおわしますが、これはむしろ新しいものといえます。

修復の終わった脚気地蔵堂

今回は、古いわりには、珍しくはじめからニックネームが付いていたらしいお地蔵さんの話です。

☆脚気（かっけ）地蔵堂

木津元村を南北に走る国道の高架と、東西に走る撫養街道が交差するあたりに、小さな地蔵堂があり、「脚気地蔵」と呼ばれて、長く地元の信仰を集めてきました。このお地蔵さんについては、次のような言い伝えが残っています。

脚気で苦しんだ遍路が、木津まで辿（たど）り着いて、とうとう歩けなくなってしまい、地元の人が手厚く看病をしたが、あえなく亡くなってしまった。その遍路がいまわの際に「自分を供養してくれたら、脚気の人を助けよう」と遺言を残した。そこで木津の人たちは、お地蔵さんを作り供養した。

というわけでこのお地蔵さんは、脚気に効く、病気を治してくれる、あるいは、お堂の周りを周囲を3度廻れば願いごとが叶うなどと信じられています。

街道ぞいのお地蔵さんです。地元の人だけでなく、遍路たちも、ここで旅の安全を祈って、西の1番札所に向かって歩いて行ったかもしれません。

☆修復工事

そういう経緯で生まれたお地蔵さんですから、長く地元の人たちの手で守られてきました。いまは木津元村の上町トシ子さんと平岡弘子さんが、熱心にお世話をして下さっています。

昨年の正月、このおふたりが年賀の挨拶にみえられた折、お堂がかなり傷んでおり、床が抜けそうな場所もあると聞かされ、それは大変と、急いで馴染みの大工さんと見に行きました。

たしかにあちこちが随分傷んでいます。さっそく見積もりをしてもらい、2月の中旬から工事に入りました。

床板や畳を替え、内外の壁も新しくしました。落ちそうだった瓦を補強し、掃除やお参りに便利なように水道も引きました。また、外からでも、夜でも、お地蔵さんの姿を拝めるように、格子戸のシートを透明なものに張り替え、照明も明るいものに換えました。というわけで、結果的には、「平成の大修理」とでも呼べそうな内容の工事になりました。

☆墓の発見

ところで、いよいよ修復工事に取り掛かった日のことです。畳と床板を剥（は）がすと、お地蔵さんの置かれた台座を覆った板の隙間から、石のようなものが見えます。板をはずしてみると、文字の刻まれ

墓石、現る。隣には首なし地蔵も。

た墓石らしきものと、その横に首の取れた石のお地蔵さんが姿を現しました。

首なし地蔵は、かつては墓石の上に置かれていたらしい形跡があります。

墓石には、正面に「繁山常昌沙弥（はんざんじょうしょうしゃみ）　天明六年五月朔日」、向かって左の側面に「越後国苅羽郡吉井村者也」と刻んでありますが、いまの新潟県柏崎市あたりです。

これがもし言い伝えの遍路の墓だったら、郷土史や遍路史にとって貴重な研究材料になるのではと考え、すぐに鳴門教育大学の先生や、県立博物館の学芸員さんに連絡を取って、見てもらいました。

また長谷寺のホームページに公開している私の日記（「ブログ」といいます）を見た人が知り合いの新聞記者に話をしてくれたらしく、毎日新聞で紹介され、続いて徳島新聞やNHKニュースでも取り上げられて、ちょっとした話題になりました。

☆誰の墓なのか

ここで亡くなったのは遍路という言い伝えが、事実か否かは確かめようもありませんが、言い伝えが残っている以上、その可能性は否定できません。しかし、遍路墓は四国の各地に残っていますが、その遍路を弔うために地蔵像を刻んで墓の上に安置し、お堂まで作って供養したという例は、寡聞（かぶん）にして知りません。そういう意味では、遍路と断じるには、いささかためらいもあります。

保存状態が良かったおかげか、墓石はとても江戸時代のものとは思えません。

全体はこういう構造

木津で行き倒れたらしい遍路は、うちの過去帳に記録があります。長谷寺の先住たちが引導を渡し、戒名を付けたのでしょう。しかし過去帳に残る遍路たちの戒名は、ほとんどが「〇〇信士（信女）」の、いわゆる二字戒名と呼ばれるもので、当時一般的だった「△△〇〇信士（信女）」という四字の戒名とは、扱いを異にしています。

墓石に刻まれた戒名「繁山常昌沙弥」は、字数が四字である上に、居士や信士の位号は「沙弥」となっています。沙弥は、出家はしているけれど僧侶の見習いといった存在とされています。

もしかしたら、遍路とは少し性格の異なる「行者（ぎょうじゃ）」といった存在だったのかもしれません。よく知られているのは「六十六部（ろくじゅうろくぶ）」と呼ばれる廻国（かいこく）の行者ですが、四国を巡れば彼らも遍路と変わらない存在になります。

あるいは、そういう半僧半俗の人が、医術を身に付けており、しばらく木津に滞在し、脚気の患者を治療したのかも知れません。その人物がこの地で亡くなったとしたら、地蔵を刻んで供養したことも不自然ではありません。

ともあれ、もし遍路墓なら極めて特殊なものですし、鳴門で初めての発見になります。郷土史の貴重な資料になることは間違いのないところで、いずれ研究の対象になることを想定して、これまでのように、地蔵のおわす台座の下に封じ込めてしまわずに、板を外せばすぐに見られる構造にしてもらいました。

☆再建

ところでこのお堂は、大正13年に再建されたという記録が、堂の内外に残っています。1924年ですから、今から90年あまり昔のこと。「再建」とありますから、以前にもお堂と

230年前の遍路墓発見

鳴門の「脚気地蔵」

台座下に3段の石積み

鳴門市撫養町木津の撫養街道沿いにある「脚気地蔵堂」で、約230年前の遍路墓とみられる石積みが発見された。地蔵は、脚気で亡くなったお遍路さんが「自分を祭ってくれれば、お参りした人の脚気を治す」と言い残したために築かれたとされ、地元の言い伝え通りに墓が見つかった。

地蔵堂は1924年に再建されたもので、近くの長谷寺（熊谷住職）が所有している。老朽化のため、今月から地蔵堂を改修していたところ、木板で密閉した地蔵の台座下部分から3段の石積み（高さ約80センチ）が見つかった。

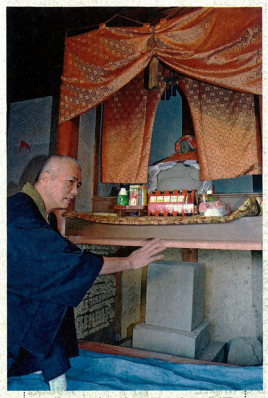
熊谷住職（60）によると、地蔵堂と地蔵はもともと地元住民が建てたもので、住民がお供え物を祭ったり掃除をしたりして長年管理してきた。

地蔵堂がある撫養街道は、撫養町にあった撫養港から同市大麻町板東の四国霊場1番札所・霊山寺に続く道で、遍路が庶民に広まった江戸時代にはたくさんの歩き遍路でにぎわっていた。

遍路墓は県内の古い遍路道沿いで確認されているが、ほとんどは雨ざらしで放置されている状態。県立博物館の長谷川賢二学芸員（51）は「地蔵や地蔵堂を建て、地域で守るという例は聞いたことがない」と話す。各地を旅していた修行者を祭っている可能性もあるとした上で、「地域の人の病気を治したり、地域に何らかの功績を残した人の墓ではないか」と分析する。

熊谷住職は「今後も大切に守り、言い伝えや由来を多くの人に知ってもらいたい」と話している。

（尾形つくみ）



地蔵の台座下から見つかった遍路墓とみられる石積み＝鳴門市撫養町木津

地域の伝承を裏付け

徳島新聞　2015年2月20日付

詠歌連中の名が刻まれた石碑

呼べるものがあったことが分かります。

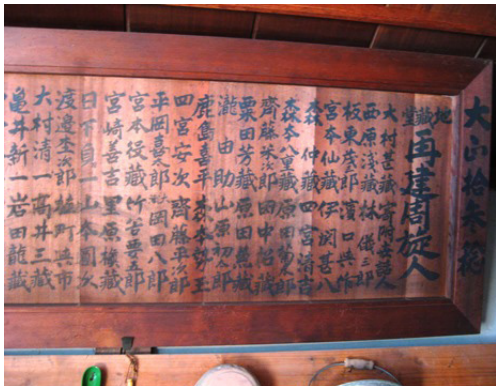
墓石の上に小さな地蔵を置いてまつり、後に小さなお堂を拵え、大正13年に、いまの立派なお堂ができた。単純に考えるとそういう流れになります。地蔵の首がとれたことが、再建のきっかけだったのかもしれません。

ただ、近隣にも地蔵堂は多いですが、これほど立派なお堂はありません。このお堂は6畳の広さで、中で法要もできるようになっています。

この再建に関しては、ふたつの記録が堂の内外に残っています。ひとつは堂の前に建つ石碑で、上部に「再建記念」と刻まれ、「発願人・功労者」を含めて26人の「詠歌連中」の名前が刻んであります。このうち23人が女性です。

いまひとつは堂内に掲げられた木製の額で、「再建周旋人」として、都合64人もの名前が記されています。

当時は各地に詠歌を唱える講があり、そのつながりで、例えば寺の修理や改築の時など、各地に出向いて詠歌を唱えては、浄財の喜捨を求めたという話を聞きます。いまでいうチャリティー・コンサート。石碑に名前が刻まれた詠歌連中が、募金活動の大きな推進力となって、再建が進められたことでしょう。だからこそ、特別に石碑を建て、名前を刻んだわけです。


堂内に掲げられた世話人さんたちの芳名額

詠歌といえば、いまも大法会のときには、境内に詠歌場と呼ばれる舞台をつくり、各地の、あるいは各寺院の詠歌講が交替して、法要の間ずっと詠歌を唱え続けています。前にはもろぶたが置かれ、参拝者たちがここに浄財を入れるという風習があり、集まった浄財は、寺に奉納されます。チャリティー・コンサートの名残を、いまに残しているわけです。

☆長谷寺に所属

ところで、大正13年のこの再建に、長谷寺が一切関わりを持たなかったとも思えませんが、少なくとも、寺も当時の住職の名前も、堂内外の記録には見えません。どこまでも地元木津の人々のお地蔵さんだったと言えます。

これが長谷寺の所属になったのは、戦時下の1940年に施行された宗教団体法によってです。国による宗教統制が強化され、町や村にある小さな仏堂は、必ずどこかの寺院への所属が義務付けられました。これにより、脚気地蔵堂を含めた、近辺に点在するいくつかの庵やお堂が、長谷寺の所属となりました。

このとき、当時の住職である、福田興邦の名で、脚気地蔵堂を長谷寺の所属とする旨の書類が、宗派の管長や県知事に提出されています。

この手続きの書類には、脚気地蔵堂の「由緒沿革」の項に「繁山当昌建立」とあり、「常」を「当」と読み間違え、彼を堂の建立者と思い違いはしているものの、興邦住職は、この墓石のことは承知していたのだろうと思われます。大正13年の再建の時点ではすでに長谷寺の住職だったので、このときに見る機会があったのかもしれません。むろん、再建に際して相談を受けたかもしれないし、落慶法要の導師を務めたことも、想像に難いことではありません。

☆募金活動

というわけで、この地蔵堂は、いまは長谷寺に属する施設ですが、長く地元の人たちが守ってきたという歴史があります。今回の修理に際しては、とくに檀家さんに寄付を募ることはしませんでした。また、地元が守ってきたからといって、地元の人に寄付を呼び掛けるとなると容易なことではありません。まさか、自治会や町内会の組織に動いてもらうわけにもいきません。

せめて、このお地蔵さんを信仰している人たちにだけ、寄付を呼び掛けてみようと、堂の正面にその旨の掲示をしました。その際、大正13年の再建時に加え、昭和61年の小修理に尽力してくれた人たちの名前も掲示し、「この中に、ご先祖さまの名前、ありませんか？」と書き添えました。

蓋を開けてみると、やはり身近な地蔵さんという意識があるのでしょうか、地蔵堂の近所に住む人たちを中心に、20人を超える方々から浄財が寄せられ、修理の経費の半分くらいはこれでまかなうことができました。お地蔵さんパワー、恐るべしです。

☆法要

墓の出現などというハプニングがありつつも、1か月余りで修理を終え、沙弥の命日の5月1日に、ささやかな法要をしました。

浄財を寄せて下さった方々に案内状を送り、お堂の正面にも案内を掲示し、当日は、参列者みんなでお経を読み、赤飯と餅を配りました。

考えてみると、「自分を供養してくれたら・・」という沙弥との約束は、守られていませんでした。お参りする人は、お地蔵さんを拝んでも、沙弥を供養しているという意識は無くなってしまっていたわけですから、いつからそうなってしまったのか分かりませんが、ずいぶん長い間供養できていなかったことになります。だとしたら、申し訳ないことでした。そういう気持ちも込めての法要でした。

修復完成記念の追悼法要

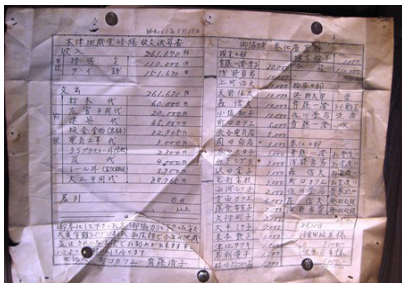
石碑に名前の残る詠歌連中のご子孫さまたちの中には、やはり詠歌をしている方がおられ、法要に先だって詠歌を唱えてくれました。

☆記録の残し方

ところで今回の修理の記録をどう残したらいいか、いささか考えさせられました。

先に記したように、大正13年の再建の際の関係者の名前は、寺の内外に残っています。また昭和61年（1986年）の小修理の記録としては、すっかり色褪せてはいますが、収支決算書が壁に画鋲で留められていました。ちなみにこのときは、長谷寺の関係者では、先住夫人の小塩和子のみが名前を残しています。

長谷寺には、この「百日紅」や、先住がいまも年頭に発行している「同信」などの印刷物が、寺の活動記録を残す役割もはたしています。


昭和の小修理の記録は決算報告でした

しかし、これから50年、100年後には、こういうものはどこかに散逸（さんいつ）してしまうことだって考えられます。もし寺に残っていたとしても、探してすぐも見つかるものでもないでしょう。

しかし、記録が「物」とともにあれば、その「物」が無くならない限り、記録は残ります。堂内に残しさえすれば、堂が存在し続ける限り、記録も残ることになります。その記録の内容が、たとえ修理の時と寄付者の名前だけに過ぎないとしてもです。

考えてみれば、どの寺も神社にも、内外に再建や修理の際の寄付者の名前が刻まれ、あるいは記されています。当初は、寄付者の名前ばかりが、いかにもこれ見よがしに並んでいることに、とても違和感があったのですが、今回のことで、たしかにあれが一番いい方法なのだなと実感しました。むろんそこには、日付と名前くらいしか記されてはいませんが、改築や修理の詳細は、「物」自身が語ってくれるのでしょう。

というわけで、今回の修理の篤志寄付の方々の名前も、額にして堂内に残しました。なお昭和61年の修理の記録は、紙が色褪せ、一部は破れてしまっています。これ以上傷まぬようにクリアファイルに挟み、元通り壁に貼っておくことにしました。

今回の芳名額。大正の額の隣に並べました。

▽　△

脚気地蔵堂の修復は、もう去年の話になってしまいました。高野山開創1200年、毘沙門堂の修復と、去年は話題が多かったので、ここまでずれ込んでしまいました。

記録として記したこの文章は、いずれ失われてしまうにしても、報告という役割だけは果たしてくれるだろうと、いささか自己満足、かつ自虐的な思いはありますが。

〒772-0004
鳴門市撫養町木津 1037-1
電話 088 - 686 - 2450
ファクス 088 - 686 - 2130
E-Mail
cho_kuma@mwb.biglobe.ne.jp
URL
http://www.chokokuji.jp/